



自然のなかで日常を分かち合う

未来へつなぐ保養キャンプ

近藤 夏織子

連載第35回

ベラルーシでは年間総被曝量1mSv以上超地域の子ども達は被曝者認定を受け、保養にいく。放射能を体外に排出してDNAの修復を早め、心身を解放するのが目的だ。が、日本では国の援助は一切ない。そこで一昨年、移住や保養を希望されている方々に、ホームステイの機会を提供しようとして立ち上げた「奈良オーガニックステイやまとのだいち」。そのメンバーが中心となつて、8月17、20日、保養キャンプを開催。「キャンプのはしご」で保養期間を少しでも長くしてもらうため、前日16日まで2週間開催された「ふくしま保養キャンプinみえ」に続けて実施した。キャンプみえ代表の村上日苗さんもゲスト参加してくださったことで、長期スパンでのケアという視点が生まれ、短期間ながら実に深い体験をさせて頂いた。2週間のキャンプを実現させた背景と展望について、日苗さんに語って頂いた。



夫で自然農業の第一人者、村上真平さんと共に、飯館村で自然食レストラン・民宿・自然農園「なな色の空」を運営していた日苗さん。3月12日早朝に村を出て、後、原発が爆発、すべてを失った。三重県津市美杉町の耕作放棄地を開墾し、昨年より自然農園「なな色の空」を再開。エコビレッジづくり、マクロビ食、避難移住者のサポート、4人の子どもの育児…、保養キャンプは日苗さんの活動の総結集とも言える。

放射能が一番大量に降下した原発事故直後、停電していた飯館村では情報が知らされず、炊き出しなど野外活動が行われていました。今、知り合いだった村の方々がどんどん亡くなっています。元気だった方が、ガンで亡くなられたり、事故後1年半でばたばたと牛が死んでしまったり。でも、村の仮設小学校は山越えた近隣地域に建設。とても近いのです。除染は、村面積のほとんどを占める山林はしないので、すぐに線量が戻ります。なのに、いずれは帰村宣言を出す予定で、帰村者には手厚い補償が出ます。避難や補償格差による分断を解消するためにも、本当は福島県内全域を移住権利区域として国が一律援助すべきだと思います。

今回のキャンプは、福島からは3家族のみ。参加理由のトップは、体調不良。喘息、鼻血、風邪をひきやすい、尿や母乳から通常の何倍もの高数値で検出されるセシウム…。つまり、放射能の健康被害は関東にも出ているということ。「本当はもっと西に移住したいけど親を置いていけない。土や草を触っちゃだめと子どもに言うのが辛い」と、シェアリングではみんな涙を流していました。しかし避難したとしても地域から孤立し、鬱的な状態になる方々も少なくありません。三重では公的に避難者の会があったのですが、福島県が三重県に停止するよう働きかけ、突然、解散。そこで自主的に「311三重ネット」を発足してつながりを維持しました。

■ 普通の人々こそ大きな力をもつ

キャンプのテーマは、「遊んで学んでつながろう」。つながることが大切です。心の奥底に眠っている思いを掘り起こしてシェアする。そしてできる限り多様な方々を巻き込み、知ってもらうことで、その輪を地域に広げるんです。キャンプでは、地域の自治連合会から募金があり、地域の花火大会にバスを出して招待してもらい、大勢の方々に紹介して頂きました。歓迎会を開いて餅つきをしてくれたお婆さん達曰く「あんたらが辛い思いで暮らしてたの知らなかった。ほんまに来てよかったわ。自分達にもやれることがあったんや」。回覧板を回してもらって、布団やシーツ、タオルもすべて頂きましたし、お米は600kgも集まり、余ったお米を東日本に発送



できました。オルタナティブで似たような意識の人達よりも、むしろ、今まで何も知らされてなかった普通の人達の方が潜在的には大きな可能性を持っておられます。あの手この手で放射能をなかったことにする国。でも地域には大きな可能性と希望があります。その地域と地域がつながればいいんです。

■ 保養キャンプは未来への種蒔き

キャンプでは、薪の火の番だけ決めて、朝食は自炊。午前は川遊びや畑仕事などで自由に過ごし、昼は、マクロビや食養生の料理人の方に来て頂いて、親子で一緒にご飯づくり。その後、食や健康についてミニ講座をしてもらいました。午後はヨガや整体、気功、演奏会など。子ども達は別室で絵本読み聞かせや落書きアート、羊毛小物づくりなどの手仕事。夜は自然農のお話会や語り合う集い。参加者からのリクエストで、キャンプ生活についてや、来年のキャンプについての話し合いも行いました。

希望は、「ここでしかできないこと」をしたい。それはつまり、私達一家の自給自足の日常そのもの。保存食づくり、自然な手当法、コンポストトイレ、子ども達は川遊び、虫取り…。生活のなかで必要なことを楽しく学んで、その智慧を持って帰りたいんです。それと、自然の中でぼーっとしたり、のんびりお茶したり。結局、飯館村で四季折々にやっていた「親子里山体験合宿」と同じでした。今、スタッフと計画し始めているのは、一般人向けの月1「保養キャンプ・チャリティー合宿」。参加者も面白い人が多いですから、ライブなど何か企画してもらったり。キャンプの準備を始めた当初は、あちこちに頭を下げての募金集めが大変でしたが、地域の協力を得て、知ってもらい、楽しんで資金集めができるんだと実感しました。参加者、スタッフ、一般の人を分けて、みんながもっているものを持ち寄って、共に自然のなかの日常を体験することで、結果的に体調がよくなるのが理想です。未来へつなげたいのです。体験を活かし、各地で希望を芽吹かせてほしいですね。

↑ 大和高原、奈良市都祁地区で開催された「やまとのだいち保養キャンプ」

← 村上日苗 (かなえ) さんと、末っ子の太郎 (たお) 君